

航空

飛行第二〇〇戦隊整備隊

フライリピン「ネグロス島

残置隊」戦記 その二

北海道 猪股義博

昭和二十(一九四五)年五月一日、「荒神山」も占領されて総崩れになり、止むなく五月中旬頃よりジャングル地帯に後退して自活自戦の撤退作戦を六月下旬頃まで続けましたが、ジャングルの生活は筆舌に尽くせぬ苦闘の連続で、隊員は栄養失調とマラリアの高熱で脱水状態になり、尻の穴が見えるようになりましたが、どうすることもでき

きない状態です。

頬は落ち、髭はボーボーに伸び放題で目だけが鋭く、山中には食糧がなくこのままでは全員餓死する他ない極限にいたりました。

そこで自活ができる開墾地を求めて更に転進することになりましたが、ここでは炊事の煙が敵に発見され、六月十三日より三日間は迫撃砲の集中砲火や、ガソリン弾投下でジャングルは焼け野原にされてしまい、以後、日中は一切の行動が取れなくなりました。この攻撃では、更に十五、六人の大きな犠牲者を出してしまつたのです。

その夕方、どこの隊なのかわかりませんが、二人の兵に付き添われた重傷の将校が我が野営地の前で動けなくなり、しきりに水を飲みたいと要求

していました。しかし、腹部銃創には水は禁物です。結局、目前の悲惨な光景にも何の助言、協力もできないまま将校は死にました。付き添いの兵は、そのまま遺体に土砂をかけるとどこかへ去って行きました。

六月二十四日、引率の長沢中尉は、私たち五人ほどの生存者を集め、ネグロス島東北にある開墾地を求めてシランパランに向け転進しました。

転進の途中でした。途中、動物すら通れそうもない峻険な谷、逆巻く急流を食糧、衣服、弾薬などの重い荷を背負い、飛び石伝いに渡河しました。しかし、体力の限界で足を滑らせて転落して全身水浸しになり、背中の荷物の重さが加わって起き上がれず、近くの峰岸伍長に浅瀬まで引つ張られて危うく難を逃れ、濡れ鼠同然ながらも体も食料も無事でした。

そんな過酷な強行軍が何日つづいたでしょうか。どんな任務だったか記憶にありませんが、川

で助けられた峰岸伍長とはその後も行動を共にしたことが多く、間近で大量の迫撃砲と重機関銃の攻撃を受けたことも思い出します。やがて、見通しのよい森に入りましたが、多くの戦死者の遺体を横目に一気に走り抜けたのは、我ながら無情だったという思いが残っています。

こんな悲惨な状況に遭遇しても、もはや特別な感情を抱く余裕もなくなっていたのは、自分自身もまた「明日は無い身か」という乾いた心理状態だったからでしょう。

またある日、隊員三人で状況偵察の帰途でしたが、細い一本道で、前方五十メートルくらいのところに突然犬を連れた民兵と遭遇しました。隊員二人は元の道に戻りましたが、私は直ちに左側の灌木の陰に伏せて民兵の通過を祈る思いで待っていました。

その時、至近距離から自動小銃の乱射があつて身動きもできず、もしここで弾を受けたらと思う

と生きた心地がしませんでした。仮に負傷程度で済んでも、体力もなく医薬品もない状態では、結局、「草むす屍」は必然のことでした。

幸い民兵は私の存在に気付かず、そのまま引き上げてゆきましたが、本当に恐ろしい孤独な一瞬でした。やっと部隊に戻りましたが、他の二人も息を弾ませながら無事に戻りました。

またある時は、加藤軍曹と二人で付近の奥地偵察に出ましたが、日帰りの予定が道に迷って帰隊できず、雨の降るなか樹の根元で携帯天幕を頭から被って、文字どおりの野宿をしました。しかし、翌日になってみると、その野宿場所は本隊からいくらかも離れていなかったのです。

七月二日、再び転進してフアブリカ南西の山中に移動し、やっと自活態勢に入りました。しかし七月十一日、自活地点で警備中にゲリラに襲撃されて第一分哨の全員九人が戦死し、第二分哨も襲撃されて二人が戦死しました。私は第二分哨に所

属していたのですが危うく危機を逃れました。

たまたまこの時、私は数人の隊員と本部にいて助かったのですが、その頃は、仮に敵に向けて反撃するとその何倍も仕返しがあるという極限の戦況にあったのです。

この戦線では地元民兵によって分哨のめぼしい物や、着替え、所持品など全てを持ち去られてしまいましたし、また多くの戦友が病魔と栄養失調に倒れ、間断のない砲爆撃で生死の境をさ迷う結果となりました。どちらの戦場に移動しても正に生と死が背中合わせでもあったのです。

そもそも第四航空軍の傘下にあった第三十戦團飛行集団長の青木武三少将は、昭和二十年一月、帝都防衛の任務を命ぜられて内地に転進帰還しました。

さらに、全フィリピンの戦況や現地事情を把握しながら、戦力回復のための機材補給の目的で、多くの幹部将校と本部要員、及び若干の整備員は飛行機や潜水艦で台湾経由のうえ内地に転進しま

したが、結局、再起の見通しが立たないまま、昭和二十年五月に飛行二〇〇戦隊は解散しました。

もちろん当時の私たち残留の隊員は、戦況や情報は一切伝えられず、ただ命令されるままに行動するほかになく、まったく先の見えない日々でもあったのです。名称は「残置隊」となっていますが、結局、私たちは置き去り、使い捨てにされたのだとも言えるのでしょうか。

残置隊長は長沢勲三中尉、工藤精八郎少尉（昭和二十年七月戦病死）、大沢好雄少尉の下、一五八人は全員一丸となり、やがて修羅場とも化すであろう地上戦に突入することを余儀なくされたのでした。多くの仲間が病み傷つき、そして一瞬にして命を落しました。

どんな目的だったか思い出せませんが、背丈ほどの灌木の茂みを数人で、前後左右五メートルほど間隔の二列縦隊で進行中に、突然銃声がしました。

私の左方から「やられた！」という声が聞こえ

ました。川出伍長だなど直ぐ分かりましたが、身動きできずしばらく無言の時が流れました。やつとの思いで「大丈夫ですかあ！」と声をかけましたが、返事はありません。おそらくは民兵に狙撃されたものでしょう。彼もまた「南の果ての草むす屍」と化したのです。

「畜生！」と心で叫びましたが、応戦はできず後退しました。この頃は積極的な対敵行動は慎重、一層警備を厳重にするようにという指示があったのです。

その後も私は多くの戦友の死に直面しましたが、よく世間で言われるような「天皇陛下万歳！」の言葉は一度も聞いたことがありません。第一線の戦場を振り返ると、そんな生易しい状況ではなく文字どおりの地獄でもあったのです。

そこでは、苦悶と絶望と怨嗟の極限しか許されませんでした。

思い返すと、終始苦楽をともにしてきた少飛出身の戦友も私の近くのタコツボで迫撃砲の直撃弾

で戦死しました。土煙が治まり、這い出して中を覗くと肉体は木端微塵、明日は我が身かと思うとさすがに恐怖感に苛まれました。

ともかく食糧は尽きてどうする事もできず、陣地を後にしては、つぎつぎと奥地の自活地帯に後退を続けなければなりません。この頃のフィリピン戦場はどの島も正に生き地獄ともいふべき、私たちにとつて最も苦しい戦闘の時期だったとも言えるでしょう。

古いことなので日時、場所が記憶から欠落しているため、記述が前後するかもしれませんが、一方ではこんなこともあったことを告白します。

農民の田畑に物資徴発（いわば奪略です）に出たときでしたが、カラバオ（水牛）を三頭引き連れて川を渡りました。カラバオは水が好きな動物のため、ぐんぐんと深みの方に引きずられ、流れの強さも重なってついつい引き綱を離してしまつて、大切な食料に逃げられたのです。

また、大沢少尉の命令で、津山兵長（少飛十四期）と二人で宿営地の林のなかで、適当な道具もないままポニー（中型の馬）を三八式銃で射殺しましたが、いざとなると屠殺の経験者がいないため処分に四苦八苦し、無我夢中の大作業の上でやつと久々の肉にありついたのでした。

さらにある開墾地では、収穫期の玉蜀黍が毎日の食料で、もう飽き飽きの状態でしたが、何分にも肝心の塩がないため、生姜や南蛮辛子で口の中を麻痺させてからやつと無理やり胃に押し込む形にもなりました。

タピオカ（澱粉用の芋）やさつまいも、バナナの新芽も食料でしたが、何といつても塩分のない生活というものは如何に苦痛なものか、つくづく実感したものです。

ともかく、毎日のように汗だくの状態ですから、当然、肉体の塩分が流出枯渇し、補給がない以上、せめて自分の汗を舐めてその場を凌ぐことで精いっぱいです。塩分の不足は頭脳の働きを鈍

らせ、気力のないただ生きているだけの空疎な存在で、つくづく人間にとって如何に塩分が必需品なのかを体験しました。

八月中旬と思われる頃、急激に砲爆撃がなくなりましたが、何か不審なままに、米軍機から散布された宣伝ビラで、はじめておぼろげながら日本軍の降伏を察知しました。

「敗戦」をどんな思いで受け取ったか記憶は定かではありませんが、おそらくは茫然自失、ともかく戦闘は終わり今日まで命が長らいだという感覚だけがすべてだったかも知れません。

八月二十八日に軍の降伏命令を受けましたが、軍使や本部が伝えることがすべて真実とも限らないという疑心暗鬼も先立ちました。

「戦いは終わった」という感動よりも、戦陣訓の「生きて捕虜の辱めを受けず」という意識が残っていたのです。「銃刀類を捨て丸腰で投降せよ」との指示を受け、集合場所に集まって白旗を

先頭に下山しましたが、誰もの足どりは重かったはずで、その数は何人くらいだったでしょう。か。

山岳地帯を通り抜けて平坦部にかかる、現地人の姿が見え出しました。何か大声で叫んでいます。四、五十人の多人数です。近づくにつれて群衆から石が飛んできましたが、軍使は一切の抵抗をするなどの注意を繰り返しました。

ある地点に来て武装解除の指示をうけ、その後は手を頭に乘せて黙々と歩くだけで、もちろん何の抵抗もできません。いや、そんな気力すら失っていたのでしょうか。投石や罵倒を浴びせる現地人の気持ちも分かりますが、戦争に負け、多くの戦友を失い、しかも捕虜となっている我が身が無性に情けなく涙がこぼれました。

やがてこの危険区域を脱し、鉄条網に囲まれた区域に入りました。米軍MPの「ハバハバ！」（急げ急げ）という大声の連発に促されて一列に並び、一斉に身体検査を受けた後、トラックで

「ファブリーカ仮収容所」に送られました。

収容所では当初、嚴重な監視を受けながらも部隊統制の取れた日課が続きましたが、しかし何もする事がなく、逆に生命の保障が危惧され、やがてマニラで絞首刑だろうとか、あるいは一生使役だろうとかの不穏なデマも飛びかいました。

そんな不安な一カ月余りの生活の後、レイテ島の収容所に転進することが決まって、ひとまず安心できる雰囲気が出てまいりました。

十月初旬「ファブリーカ港」からLST物資輸送船に乗船し、快晴のもとで一路レイテ島に向かいましたが、それぞれが船上に出て次第に遠ざかるネグロス島を望みました。

思えば昭和十九年十月末に、あの島の「サラビア飛行場」に着陸転属してから丸一年、色々な思いが走馬灯のように脳裏を駆けめぐりました。あの山、あの稜線、あの谷間の激戦、そして亡き戦友の面影や死の間際に動いた口元なども

生々しく、万感の情が込み上げて来ました。

どの位たったのか、やがて船はレイテ島オルモック湾に入りましたが、視界には日本の巡洋艦や駆逐艦が何隻も繋がれているのが目につきました。タクロバン埠頭で下船し、その後何キロか歩いて鉄条網が三重の「タクロバン捕虜収容所」に到着、そこで丸裸にされて身体を消毒され、被服や帽子、靴、食器などの配給を受けました。

収容所の生活はさすがに最初は不安の連続でしたが、時がたつにつれて次第に慣れ、「戦った、敗れた、そして生き残った」という実感と同時に、早々にも帰国したいという思いが全員を覆いました。

私の帰国は比較的早期に実現しました。

収容所ではいわゆる戦争犯罪追求が徹底して、一定の基準による個別の摘発調査があったようでした。例えば、物品食料の徴発、強制使役、傷害殺人など住民に危害を加えた者や、その他の

不当行為があつたと判断された者は、早くても半年から一年、中には数年間抑留されたそうです。

幸いにもそんな不当行為者としての指摘から除外された私は、約一カ月後の昭和二十年十二月初旬、ついに夢にまで見た日本への「帰国船」乗船が許されました。歡喜の声が収容所を包みましました。

その帰国船の船員は日本人で、いろいろのことを話してくれました。日本国内は地方都市までほとんどが焼け野原であるとも聞かされました。

やがてバシー海峡を通過しました。この海峡の付近海域では、資材輸送や戦場に向かう兵士を乗せた船舶が、米軍の潜水艦攻撃を受けて多数沈没し、大量の戦死者も出たことを知りました。

指揮官と船長の命によって、海峡の藻屑と消えた多くの英霊に全員で心からの黙禱を捧げました。

「彼らは水漬く屍となり、我は生きて祖国に向かう、御霊よ許せ、御霊よ安らかに」と、私は心

でそう祈っていました。

十二月中旬、やっと浦賀港に入港、憧れの祖国の大地を再び踏みしめることができました。祖国の風はやさしく、人々は温かく迎えてくれました。

整備特幹同期でフィリピンに派遣されたのは九十二人ですが、戦死者は七十四人にのぼって、実に八十パーセントの戦死者を出しました。うち柏市の第四航空教育隊以来の同期戦友でネグロス島に派遣されたのは私一人でしたが、その私が生還できたのはまったく奇跡としか言いようがありません。

思い返すと、フィリピンの戦場においては、あまりにも複雑多岐な現実を体験し、様々な人間像にも遭遇しました。断片的な記憶が頭脳の隅から次々と残像として浮かびあがってきます。この戦記に書ききれないような悲惨な情景も多く、それだけに胸の底からこみあげてくるものもあり、何

度か涙が流れて筆記を中断したことも再三でした。

なおここで、私たちと同行した「整備隊軍属」について一言触れておきます。

そもそも「明野陸軍飛行学校」は戦闘機操縦者を養成、教育する学校であったため、整備や通信は長年、軍属で支えられて来ました。

この度の戦隊編成にあたっては、四式戦闘機を動かす熟練した多数の整備員が必要でしたが、すでに明野陸軍飛行学校ではこの軍属に代えるため、「特別幹部候補生」や「少年飛行兵」の整備員教育を急いでいたものの戦隊編成には十分な態勢をとれず、結局多数の軍属を編入させることになったのです。

軍属は、我々よりはるかに年配者が多く、経験も技術も豊かな親父のような存在で教えられることが多く、部隊にとっても貴重な存在でした。

結局、軍属の皆さんもネグロス島に残置されて

数々の戦闘に参加し、多くの犠牲者を出しましたが、戦隊史の陰に潜められたその功績は大きく、私たちにとっては忘れられない数々の思い出を残してくれました。わずかに生き残った軍の一員としてあらためて心から感謝申し上げたいと存じます。

本編中の用語説明

- 特幹 特別幹部候補生
- 少飛 少年飛行兵
- 乙幹 乙種幹部候補生
- 航空教育隊

特幹入隊に併せて設置された航空関係整備要員の短期養成機関で、全国に八箇所開設され、約四万人（一期から四期まで）が配属された。

専門分科としては、機関、電気、計器、武装、爆装金属、写真などがあった。

あとがき

あれからすでに五十六年が経とうとしていま
す。

あの悲惨な戦場の記憶が蘇る度に、正に一瞬の
運命に支えられた人生でもあったことを実感しな
がら、多くの亡き戦友の御霊安かれと心から冥福
を祈りつつこの手記を終えます。

なお、私が志願入隊した「陸軍特別幹部候補
生」の各航空兵科入隊者は約七万人とも伝えられ
ていますが、通信、射手、航法などの一部には空
中勤務者として実戦に参加して戦死した者も少な
くなく、また満州や中国などの大陸や、台湾、朝
鮮、マレー半島に派遣された者も多いと聞いてい
ます。ただ、フィリピンのように第一線の地上戦
闘に参加したのは私たち二〇〇戦隊だけだった模
様です。

私の旧制余市中学校同期生のうち、在学中に予
科練や特幹に志願入隊したものは全体の四十パー
セントに近く、思えば暗い青春の時代でした。

—資料—

飛行第二〇〇戦隊整備隊の編成人員・戦死者概
要

◎ 整備隊の総数 四三一人

(搭乗員を除く)

(戦死及び生死不明者 三〇五人)

ネグロス島派遣隊 一五八人

(戦死者 一〇二人 生還五六人)

ルソン島派遣隊 二六五人

(戦死者 二〇〇人 生還六五人)

◇ 整備隊長 及川修次大尉

◇ 第一中隊長 榊原弘光大尉

◇ 第二中隊長 今村誠一中尉

隊付 長沢勲三中尉

内訳

将校 二一人 (戦死 五人) (生還一六人)

下士官 九八人 (戦死六八人) (生還二九人)

特幹 九二人 (戦死七四人) (生還一八人)

少飛 九四人 (戦死七〇人) (生還二四人)

一般兵 三六人（戦死二九人）（生還 七人）
軍属 九〇人（戦死五九人）（生還二九人）

飛行第二〇〇戦隊指揮系統

南方軍總司令官 寺内寿一元帥

第十四方面司令官 山下奉文大將

第四航空軍司令官 富永恭次中將

第三十戦闘飛行集團長 青木武三少將

飛行第二〇〇戦隊長 高橋 武中佐

整備隊長 及川修次大尉

〔編注〕

猪股義博氏の手記(一)はXIII巻に掲載されておりま
す。

私の戦争体験

高知県 大崎 良男

我が日本の国力すべてを投入した太平洋戦争が
終結して早くも五十余年。「歳月は人を待たず」
とか、本当に早いものだと思います。

悲惨な終戦、今もなお人に語るも涙、聞くも悲
しき次第で、まして書くなど本意ではありません
が、国政を預かる国会議員から「太平洋戦争は侵
略戦争であった」との発言を聞き、ペンをとるこ
とにしました。

当時は、国の命ずるままに若き命を自ら捨てる
徴兵制度が、日本国民男子の三大義務の一つでし
た。彼らの心中、家族の胸中を察すると義憤やる
かたありません。

私達一般国民には是非曲直を論じて自由を主張
することなど許されるはずもなく、もしそのよう